



令和二年
日本遺産認定

レイラインがつなぐ 「太陽と大地の聖地」

～龍と生きるまち 信州上田・塩田平～

独鈷山と夫神岳から扇状に開ける地・塩田平は、古来「聖地」として、多くの神社仏閣が建てられている。

山のふもとにある信州最古の温泉といわれる別所温泉、「国土・大地」を御神体とする「生島足島神社」、「大日如来(太陽)」を安置する「信濃国分寺」は、一本の直線状に配置され、レイラインをつないでいる。

夏至と冬至に、鳥居の中を太陽の光が通り抜け、神々しくぬくもりのある輝きを享受できるのだ。

先人たちが、この地が特別であると後世に伝えようと遺した様々な仕掛けは、今も、訪れる人びとにパワーをチャージさせる。

日本遺産関連情報は
下記QRコードから



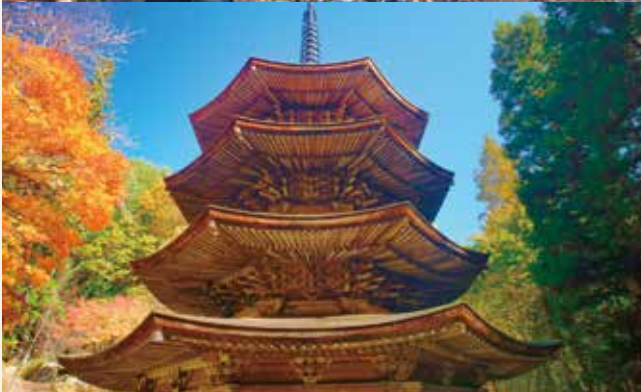
© 岡田光司

長野県上田市

レイラインがつなぐ「太陽と大地の聖地」物語

～龍と生きるまち 信州上田・塩田平～

弘法大師ゆかりの前山寺



安楽寺八角三重塔

「信州の学海」

上田は、険しい山々に囲まれた盆地ゆえに、本州では一番雨の少ない地だ。「おてんとうさま」が毎日のように微笑み、穏やかな気候という特徴は、信濃国分寺が置かれたこと、鎌倉北条氏の一派が終の棲家としてここを選んだ理由でもある。

塩田平には数多くの寺社が建てられ、中国の高僧や多くの学僧が訪れたのは、山を背に構える別所温泉があったことが大きい。豊かな湯で心まで洗われる温泉の楽しみがあったからこそ、僧たちは、この地を訪れたのであろう。

別所温泉にある安楽寺を訪れてみると、薄暗い木立の中、見上げるように階段を登った先に、日本唯一の木造八角三重塔が目飛び込んでくる。微かな光の方向に仰ぎ見る屋根裏の華やかな木組みは、私たちを自ずと厳かな気持ちにさせてくれる。しかも「四重塔」にも見える不思議な形だ。

また、北向観音堂は、善光寺と「両参り」すると御利益が増すという。境内の手水(ちょうず)までも温泉を使い、湯煙が立ち上がる境内には温泉の匂いが漂う。見晴台に立つと、塩田平から市街地までを見渡せ、我はこの地に降り立ったのだ、という気持ちにさせられる。この地が僧たちにとって「特別な場所」であり、「別所」と名付けられたことも納得できる。湯煙が漂う地に花開いた仏教文化の遺産は、湯浴みの效能のみならず、訪れる人々を癒している。

別所温泉の岳の幟行事



ささら踊り(岳の幟)

神宿る「山」への祈り

上田の雨が少ない気候は、風雨が引き起こす災いからこの地の暮らしを守ってきた。しかし、それゆえに神は時として干害などの試練を課してきた。人びとは水源となる山々に神を崇め、祈り、恵みの雨を願った。

500年以上も続く雨乞いのまつりである「岳の幟(たけののぼり)」は、色鮮やかな幟が特徴的だ。「下り龍」を描いた幟で、夫神岳山頂に祀られた「龍“オカミ”」と呼ばれる九頭龍神を山麓の別所神社までお連れする。龍をかたどったたくさんの幟を迎えるのは、三頭獅子とささら踊りの子どもたち。カラフルな幟と衣装が鮮やかに映え、山間に歌声と太鼓の音が響くころには、本当に、龍からの雨に恵まれる。

山には、古より受け継がれてきた水への憧れと神への畏怖が投影される。龍が宿るこの山は、山菜や松茸など、山の幸をはぐみ、マツタケ小屋の隆盛につながっている。

日本遺産とは、文化庁が認定した、地域の歴史的的魅力や特色を通じて日本の文化・伝統を語るストーリーであり、各地域の魅力あふれる有形・無形の文化財群を、地域が主体となって整備活用し、国内外へ発信することで地域活性化を図るものです。（全国104件、県内4件認定）

独鈷山と舌喰池



前山寺三重塔

祈りの言葉は 「アメフラセタンマイナ」

塩田平はため池を造って水を蓄え、ここで温めた水を田んぼに入れて稲の生長を促し、「塩田三万石」と呼ばれる上田随一の穀倉地帯へと変身した。ため池でも「百八手」と呼ぶ雨乞いのまつりが行われる。池の周りを大勢で囲んで「たいまつ」に火をつけ、もくもくと上がる煙のなか「アメフラセタンマイナ」と唱える。ため池は稲穂をはぐむだけでなく、マダラヤンマなどの命もつないできた。人柱やカッパなどの伝説は、ため池にも神を崇めていたことをうかがわせる。

雨を願う人びとは、時に荒療治として路傍のお地藏様を川へ放り込んだ。ここでも祈りの言葉は「アメフラセタンマイナ」。お地藏様を怒らせてでも、龍(雨)との再会を願っていた。

独鈷山と夫神岳、そして麓の寺社は、常に塩田平の人びとの暮らしに寄り添ってきた。そして、路傍のお地藏様は、また川に投げ込まれないかと心配して、今日も雨雲を待ちながら空を見上げている。これが「山に神、野に仏」とも言うべき、上田の人びとががつないできた「祈りのかたち」だ。

別所線の千曲川橋梁



レイラインに沿って走る別所線

未来への懸け橋

このように塩田平には、この地を特別な「聖地」とする景観が遺されている。国土・大地を祀る「生島足島神社」、「大日如来(太陽)」が安置された「信濃国分寺」。生島足島神社は夏至には太陽が東の鳥居の真ん中から上がり、冬至には西の鳥居に沈む。太陽と大地は、この神秘的な光景をレイラインとして現代に遺した。

そして、この「太陽と大地の聖地」に重なるように遺したもうひとつの景観が、100年前から守り続けてきた鉄道・別所線だ。生島足島神社から、別所温泉までの軌道は、不思議なことにレイラインと一致する。そして、駅をつなぐ線路は、空から見ると龍のかたちをしていると言われる。塩田の人びとは龍を特別な神として崇め、祀り、龍とともに生きてきたことを、別所線の軌道に投影して大切に遺してきたのだ。龍の背に乗ってめぐる「太陽と大地の聖地」は、これからも、まぶしいばかりの輝きとぬくもりをもって、訪れる人の心に光を与えてくれるだろう。



レイラインがつなぐ 「太陽と大地の聖地」

～龍と生きるまち 信州上田・塩田平～



「レイライン」とは、 夏至の朝日が照らす光の線

レイラインは、「大日如来(太陽)」を安置する信濃国分寺と
「国土・大地」を御神体とする生島足島神社を直線状に結んでいる
朝日が照らす光の線のことです。

〔構成文化財一覧〕

信州の学海

- ① 安楽寺八角三重塔
- ② 木造惟仙和尚坐像・木造恵仁和尚坐像
- ③ 常楽寺本堂
- ④ 常楽寺石造多宝塔
- ⑤ 北向観音堂
- ⑥ 善光寺地蔵絵馬
- ⑦ 愛染カツラ (別所五木)
- ⑧ 舞田の石造五輪塔

神宿る「山」への祈り

- ⑨ 前山寺三重塔
- ⑩ ちがい石とその産地
- ⑪ 西光寺阿弥陀堂
- ⑫ 中禅寺薬師堂
- ⑬ 中禅寺木造薬師如来座像
- ⑭ 中禅寺木造金剛力士像
- ⑮ 前山塩野神社拝殿及び本殿
- ⑯ 法住寺虚空蔵堂 附 厨子
- ⑰ 別所温泉の岳の幟行事
- ⑱ 別所神社本殿
(神楽殿)(本朝縁結大神祠)
- ⑲ 鞍が淵と蛇骨石

祈りの言葉は「アメ フラセタンマイナ」

- ⑳ 千駄焚き・百八手
- ㉑ 奈良尾石造大姥坐像
- ㉒ 保野の祇園祭

未来への懸け橋

- ㉓ 信濃国分寺跡
- ㉔ 信濃国分寺本堂
- ㉕ 信濃国分寺三重塔
- ㉖ 信濃国分寺石造多宝塔
- ㉗ 牛頭天王祭文
- ㉘ 上田市八日堂の蘇民将来符
頒布習俗
- ㉙ 八日堂縁日図
- ㉚ 泥宮
- ㉛ 生島足島神社本殿内殿
- ㉜ 生島足島神社摂社諏訪社本殿
- ㉝ 生島足島神社文書
- ㉞ 長福寺銅像菩薩立像
- ㉟ 別所線の鉄道施設



日本遺産関連情報は
下記QRコードから



例 言

- 1 本書は長野県上田市において令和3年度に実施した、日本遺産補充調査の報告書である。
- 2 調査は、令和3年度芸術文化振興事業費国庫補助金を得て、上田市日本遺産推進協議会（事務局：上田市政策企画部交流文化スポーツ課）が直営で実施した。

〈上田市日本遺産推進協議会〉会 長 土屋陽一（上田市長）
副会長 西澤恒幸（塩田平文化財保護協会会長）
副会長 峯村秀則（上田市教育委員会教育長）
委 員 中村 彰（上田市自治会連合会会長）
委 員 児玉卓文（上田市文化財保護審議会会長）
委 員 小林信彦（長野県上田地域振興局商工観光課長）
委 員 久保友二（長野県教育委員会文化財・生涯学習課長）

調査組織（事前準備・現地調査・整理・報告書刊行）

担 当 者 古平浩之・谷口弘毅・中田由真（上田市教育委員会生涯学習・文化財課）
調査協力者 武笠朗（実践女子大学教授）
現地協力者 （西内の歴史を学び伝える会）池内宣訓（会長）・滝沢瑛光・永井教雄・永井恒雄
写真提供者 岡田光司

- 3 調査は、現地調査、整理、報告書刊行を含めて、令和3年11月9日から令和4年3月18日まで行った。
- 4 本書の編集刊行は事務局が行った。本文の執筆及び総括は谷口が行い、古平・中田がこれを補佐した。
- 5 調査に際し、西内歴史研究会（会長 池内宣訓氏）に資料提供及び現地調査同行等の配慮を賜った。
- 6 本書が刊行されるまでには、多くの方々や諸機関の御理解と御協力を賜った。以下、御芳名を記して深く感謝の意を表したい。（順不同・敬称略）

文化庁文化財部記念物課、長野県教育委員会文化財・生涯学習課、
岡田光司
西内歴史研究会
武笠朗

目 次

第1章 調査の目的と方法	2
第1節 調査の目的	2
1 「レイライン」をめぐる課題	2
2 認定エリア内における新たな構成文化財候補物件の抽出	2
第2章 調査の結果	4
第1節 レイラインに関する補充調査	4
1 レイラインに関する現地調査	4
2 西内地区の水・太陽に関する信仰	5
3 塩田平のため池群に関する補充調査	21
第3章 調査の成果と課題	22
1 レイラインに関する現地調査	22
2 西内地区の水・太陽に関する信仰	22
3 塩田平のため池群に関する補充調査	23

参考資料 令和2年度日本遺産認定申請書から抜粋

様式3-1 構成文化財一覧表 / 様式3-2 構成文化財写真一覧

第1節 調査の目的

本書で報告する補充調査は、上田市の日本遺産「レイラインがつなぐ「太陽と大地の聖地」龍と生きるまち 信州上田・塩田平」のストーリーを補完し、その魅力アップを目的として、市民への周知の根拠となる情報収集と、新たな構成文化財の候補物件を抽出するために行った。なお、今年度も度重なる新型コロナウイルス感染拡大のため、当初の調査計画を大幅に縮小して実施せざるを得なかったが、次に述べる調査項目について、感染予防対策を講じた上で実施した。

1 「レイライン」をめぐる課題

「レイライン (Ley line)」とは、「夏至や冬至の太陽が照らす光線に沿って遺跡や文化財が直線的に並ぶこと」とされる。令和2年6月の認定当初から、「レイライン」という用語については、学術的裏付けがないとの御意見をいただく機会が何度もあり、「文化財を行政が『スピリチュアル』な側面から取り扱うべきではない」との御批判もいただいている。確かに、史跡信濃国分寺跡をはじめ、生島足島神社、泥宮、別所温泉の仏教文化財群の建立は必ずしも同じ時期ではなく、いわゆる「レイライン」を意識して選地されたことを示す資料の存在も確認できない。

今回のストーリーでは「夏至の日の出と冬至の日の入りを結んだ直線」をレイラインと呼び、視覚的なイメージとして「夏至の朝日が照らす光の線」としている。そして、この光線が照らす塩田平周辺には、全国に例を見ないほど、国宝・重要文化財に指定された貴重な文化財が多数存在していることをストーリーの背景にしている。雨が少ない内陸性の気候のもと、「龍と生きるまち」で、山や川などに宿る「神」を畏怖しながら暮らしてきたなかで、住民が太陽を意識して暮らしてきたことは想像に難くない。

しかし、いわゆる「レイライン」をはじめとした太陽と神社仏閣といった文化財との関わりについて、これを具体的に示すことが出来る資料等を、私たちは持ち合わせていないことも事実である。

こうした現状から、レイラインについて多角的に検証し、「太陽信仰」という民俗学的な立場や、レイライン沿いの文化財と太陽との関係性を客観的に説明することが出来るようにし、日本遺産の趣旨である、「地域住民が身近な文化財の価値と魅力を知り、シビックプライドを醸成することで、文化財の保存と観光振興、地域づくりに活用」していくことが出来るよう、補充調査を行った。

2 認定エリア内における新たな構成文化財候補物件の抽出

今回の日本遺産認定申請に当たり、国宝・重要文化財を中心に、未指定の文化財も含めて、構成文化財には35件を申請し、認定を受けた（本書26頁）。塩田平を中心に、信濃国分寺周辺、丸子温泉郷、別所線沿線から、ストーリーに関連した文化財を抽出したが、各エリアで構成文化財の数に多寡があり、今後の事業推進に当たって、地域の皆さんの自発的・自走的な文化財保存活用の取組を進めていくために、構成文化財を追加することも検討すべきと考えた。

そこで、令和2年度には独鈷山の南山麓（丸子温泉郷エリア）において、(1) 龍に関わる文化財、伝説等の所在調査、(2) 雨乞いのまつりの所在調査、(3) 太陽信仰に関わる文化財、伝説等の所在調査を実施したが、新型コロナウイルス感染症の影響により西内地区の一部のみの実施にとどまった。そこで、今年度は西内地区の未実施地域（鹿教湯温泉地区）を中心に下記のとおり調査を実施した。

(1) 水の信仰に関する所在調査

令和2年度の調査において、鹿教湯温泉地区南側の「渋田（しぶた）見山（みやま）」山頂付近にある沼において水に関する信仰があり、かつて祭事が行われていたとの情報を得ていたが、現地調査が未実施であったため、今年度実施した。また、山麓において里宮が置かれていることも確認されたため、その現地調査も実施し、後述するような結果を得た。

なお、今回の聞き取りなどによる調査では関連する情報を得ることができなかったが、鹿教湯温泉地区の北側に聳える「大明神岳（1,232m）」について、雨乞いとの関連を指摘する研究（五十嵐 1996）があり、興味深い。大明神岳は南側山腹に「たぶ」と呼ぶ湿地があり、これが南東山麓の水源となっていた可能性が高いこと。また、南麓にある「びあげ」地名は「雨乞いの際に大火を焚くところ」（五十嵐 1996）に由来するとの指摘もあり、鹿教湯温泉地区を挟む南北ふたつの山で雨乞いが行われていた可能性がある。雨乞いは、昨年度調査した内村川中流域（西内地区東部域）ではほとんど行われていなかった可能性が認められ、源流域にある鹿教湯温泉地区で雨乞いが集中的にみられることは、雨乞いの対象となる水源となる山の存在が大きく、地勢的な影響と見て良いのではないか。

(2) 龍に関わる文化財・伝説等の所在調査

令和 2 年度調査報告書（20p）で紹介した、霊泉寺に伝わる龍の伝説「不明門（あかずの門）」のほかに、龍に関わる文化財や伝説等が存在するか、鹿教湯温泉地区と霊泉寺周辺で引き続き調査を行った結果、新たに 2 件の伝説を確認することが出来た。そのうち 1 件は、「水神」としての龍に近い内容のものであり、昨年度の調査で得た、隣接する松本・安曇野地域の「犀龍」との近似性だけで、丸子温泉郷の龍伝説を説明できないことが判明した。

(3) 太陽信仰に関わる文化財、伝説等の所在調査

令和 2 年度は平井地区において、レイラインを太陽信仰との関連で考えることができないかという仮説のもと、太陽信仰と関係が深いとされる、天照大神を祀る社、大日如来の分布状況を把握するため、「西内の歴史を学び伝える会」に同行を依頼し、下記の項目について、聞き取りと文献調査を行った後、現地調査を実施した。今年度は、昨年度に未実施となっていた鹿教湯温泉地区について、同様に調査を実施した。なお、同会への聞き取りの中で、平井区公民館内に木彫の仏像が安置されているとの情報を得たため、未周知の大日如来像である可能性があったことから、実践女子大学の武笠教授に同行を依頼し、調査を実施した。

また、塩田平に点在するため池については、独鈷山、夫神岳、産川などと同様に認定ストーリーを語る上で必要な背景として位置づけていたが、古くは真田氏の時代に築造されたとも言われ、江戸時代に上田藩・仙石氏の農業振興政策で推進されたため池の歴史を鑑み、構成文化財として位置付け、積極的に活用していきたいとの地元からの要望を受け、補充調査を実施した。これまでの地元住民による「塩田のため池を愛する会」ほかの調査・研究の成果をまとめたほか、木樋などの遺物についても現地調査を実施した。

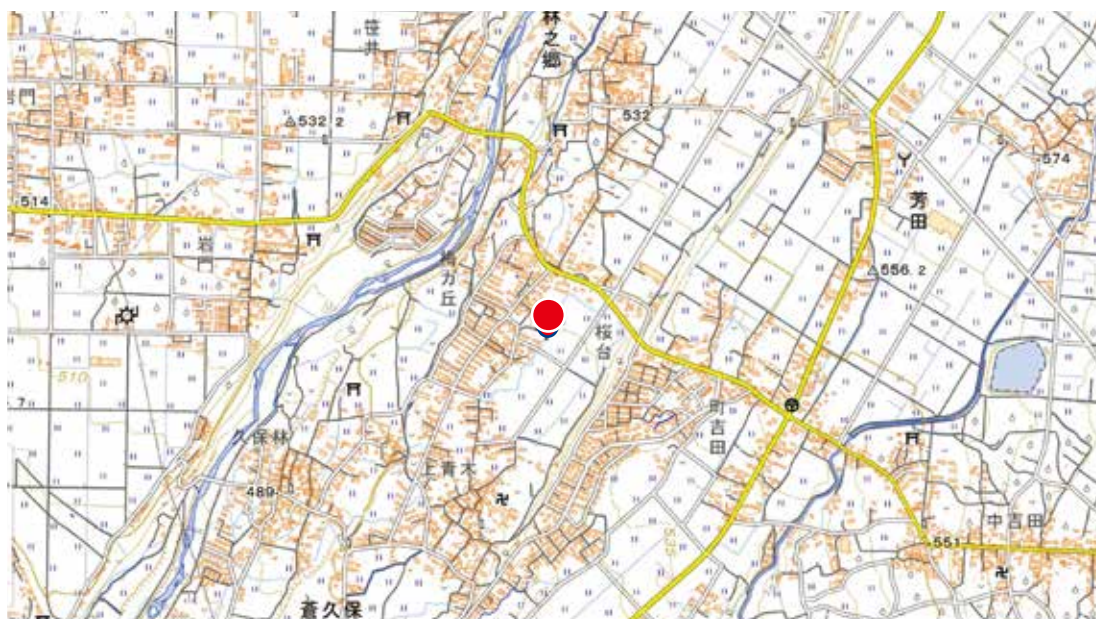
第1節 レイラインに関する補充調査

1 レイラインに関する現地調査

昨年度の補充調査の際に把握していなかったが、レイライン（夏至の日の出と冬至の日の入りを結んだ直線）上に位置する神社（石祠）を1件確認し、現地調査を実施したので、ここで報告したい。

(1) 天照皇大神宮〈上田市 上青木〉未指定

字の如く天照大神（アマテラスオオミカミ）を祀る神社である。石祠であり、木造の本殿・拝殿がある大きな神社ではないため、昨年度報告した複数の神社のように、鳥居越しに日の出や日の入りを拝むことはできない。しかし、本事例をはじめ、こうした太陽を象徴する天照大神を祀る神社が、太陽の動きを意識して設置されている可能性が高く、認定エリア及びその周辺に存在する他のレイライン上の神社とともに、ストーリーの中で構成文化財として位置付け、活用することが出来るのではないと思われる。



地図 1

国土地理院地図を加工して作成



写真①「天照皇大神宮」

(2) 生島足島神社 御旅所

生島足島神社の北東に位置し、石祠は「太陽の線」上に位置する（相原 2020）とされる。昨年度の調査報告書（15p）では鳥居と日の入りとの関連について未確認としたが、今年度の調査の結果、やはり関連は認められないことが判明した。地元の皆さんの聞き取りによれば、鳥居が石祠との正面とは異なる方向を向いているのは、やはり諏訪大社（生島足島神社はかつて「諏訪大明神」であり、構成文化財とした武田信玄の願文（国重文）等が伝えられている。なお、御柱祭は現在も行われている）を意識しているのではないかとのことである。

2 西内地区の水・太陽に関する信仰

(1) 水の信仰に関する所在調査

まんねん く ろうめま

① 万年九郎沼大明神

令和2年度の「上田市日本遺産補充調査報告書」（20-21p）に紹介した、渋田見山山頂付近の「万年九郎沼大明神」について、今年度現地調査を実施した。

渋田見山は鹿教湯温泉の南側に聳える標高 1,554m の山で、武石地域との境に位置する。その山頂付近にある沼が地域の雨乞いの対象となっており、脇には石祠が祀られているという。かつては6月1日に地域の住民が登り、祭事を行っていたが、昭和の初めころ麓に里宮を造営しそこで行うようになったという。現在では里宮での祭事も行われていないとのことで、山頂付近へ登ることもないという。

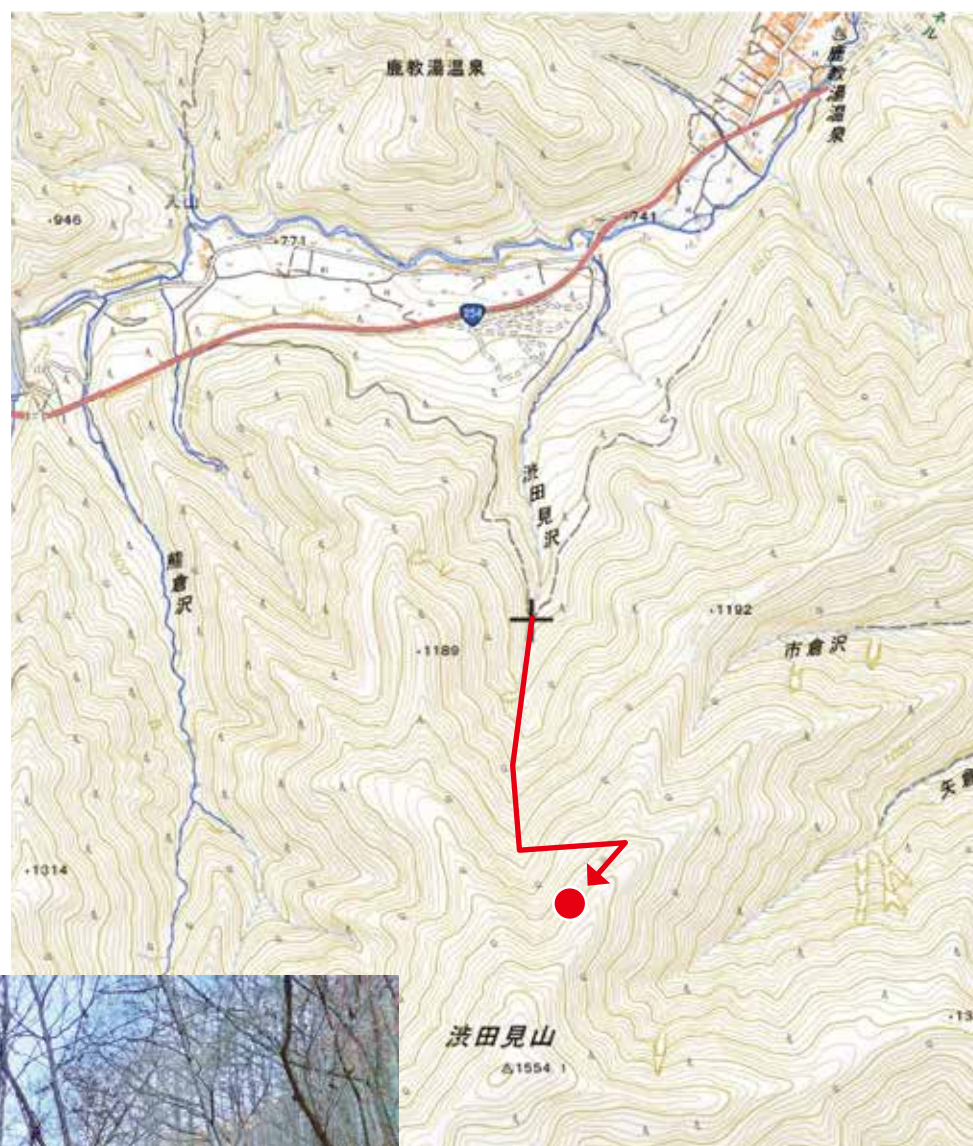
渋田見山への鹿教湯温泉側からの登山道はないとのことで、国道 254 号線から分岐する林道を進み、渋田見沢との交差点から沢沿いに登ることとした。調査時期が初冬であり、落ち葉がかなり厚く積もっている中、急な斜面を登る必要があったため、所々非常に危険な場所もあり、信仰の対象となることを実感する場面もあった。中間地点付近で沢水が確認できなくなり、さらに谷筋を登っていくと数か所炭焼き場の跡と思われる平場も確認された。古くから人々の生活に密着していた山であることが窺える。林道から2時間30分程度登り、山頂へつながる東側の尾根上から少し西側に入った標高 1,418m 付近に 10m × 8m 程度の沼が確認された。かつてはシジミが生息していたというが、現状は荒れた沼地となっており、おそらくイノシシ等の沼田場（ぬたば）になっていると考えられる。

周囲に石祠は確認されなかったが、沼の西端にその台座と考えられる長方形の石材が確認された。おそらく沼の脇に安置されていた万年九郎沼大明神の石祠がイノシシ等の動物により倒されたものと考えられる。屋根や壁などの部材は見つからなかったが、何者かが持ち去ることも考えにくい場所であるため、沼に沈んでいるものとも考えられる。また、かつてはシジミが生息していたとの情報があったが、確認することはできず、その他の生物の生息も確認できなかった。



地図 2

国土地理院地図を加工して作成



地図3 国土地理院地図を加工して作成



写真②「渋田見沢」



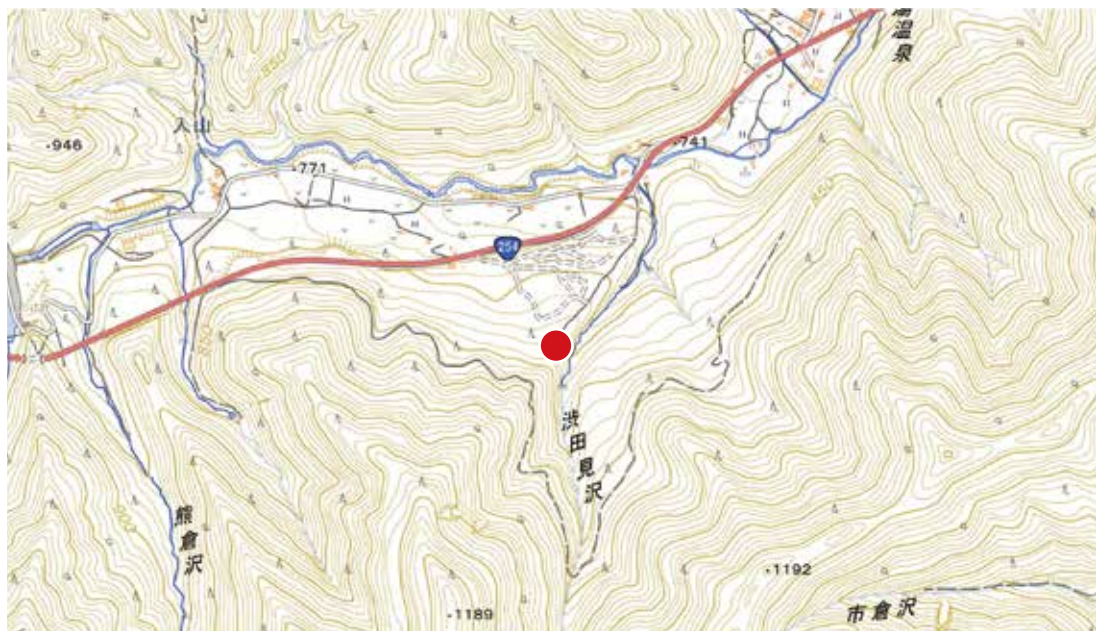
写真③「万年九郎沼」



写真④「万年九郎沼大明神の一部と思われる石材」

② 万年九郎沼大明神里宮

①の万年九郎沼大明神を麓におろしたという里宮は国道 254 号線山の神橋の下から 500m 南側に登った洪田見山の麓に位置する。標高は 830m 付近で、高さ 1m 程度の木製の祠で、外側に覆屋が設置されている。内部には 3 本の柱が祀られていることが窺えるが、判読はできない状態であった。その台座には「昭和十一年六月一日鎮座」とあり、「昭和の初めころ」という聞き取りを裏付けることができた。覆屋により祠の状態は悪いものではなかったが、定期的な管理は行われていないことが窺えた。



地図 4

国土地理院地図を加工して作成



写真⑤「万年九郎沼大明神里宮」

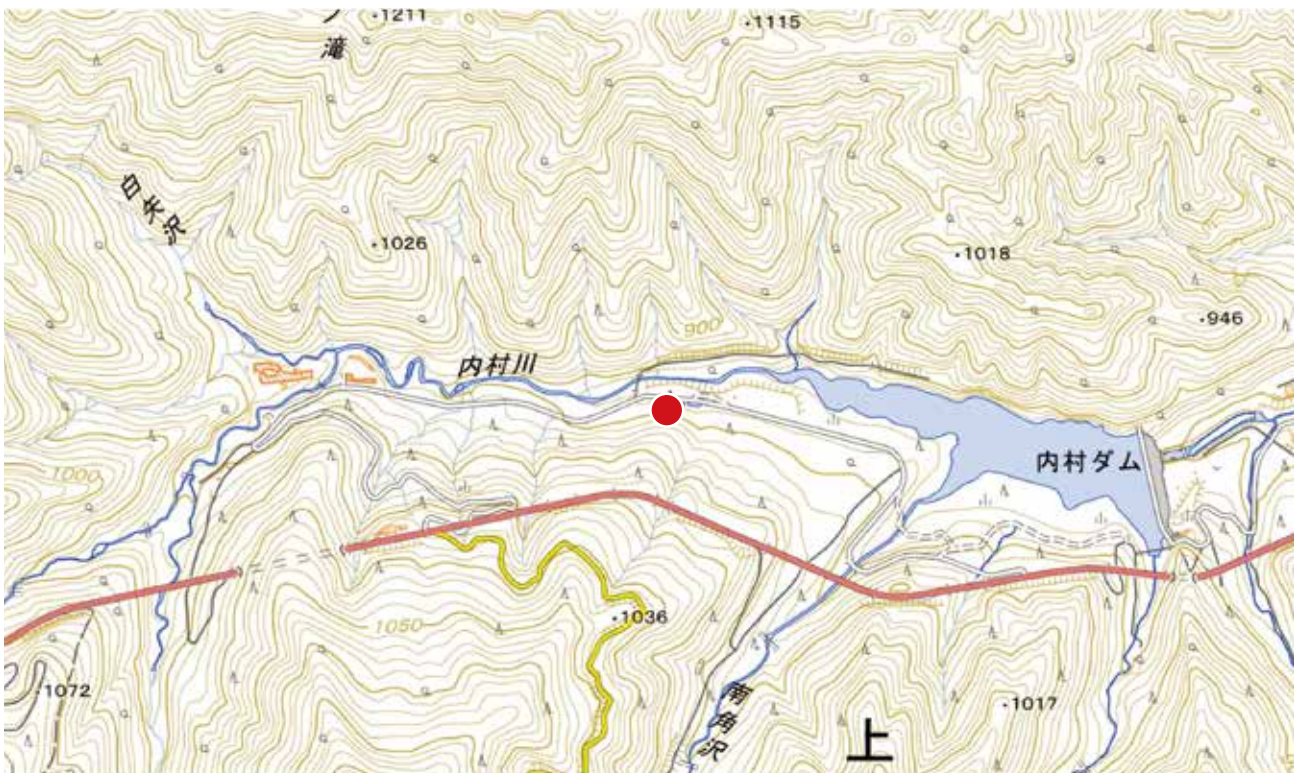
③ 苗鎌神社

内村ダムの西側、国道 254 号線から鹿教湯三才山リハビリテーションセンターへ向かう道沿いに位置する。地元の呼称や鳥居、千曲バス「鹿教湯線」の停留所名（令和元年廃止）は「苗鎌」となっているものの、『丸子町誌』民俗編（丸子町 1992）や『鹿教湯の里』（斎藤守 1976）には「薙（なぎ）鎌（がま）」と表記されている。

『丸子町誌』民俗編には「農作物の稔が近づく二百十日の頃、強い風が吹いて被害を受けることが多かった。この災難を未然に防ぐため、風祭りを行ったところがあった。鹿教湯の奥、笠岩の入口から更に進むと巨木の根元に鳥居と石の祠がある。これが薙鎌様で、八月下旬若い衆が集まり風祭りと称して参詣、二百十日の嵐も無事に済み、五穀豊穰の祈りをこめる。」とある。

また、『鹿教湯の里』には「笠岩の入口からさらにバス道を八〇〇米進みますと、人家の左側の巨木に、鳥居と石のほこらがあります。ここを薙鎌様と呼んでおります。毎年八月の下旬には、若い衆が集り“風祭り”と称して参詣をし、二百十日の嵐も無事に過ぎ、五穀豊作の祈りをこめて昔から行われてまいりました。」とある。

この「風祭り」については現在行われておらず、「西内の歴史を学び伝える会」のメンバーの認識としては「農業の神様」とのことであった。「薙鎌」については諏訪大社でも風雨鎮護のために行われる「薙鎌打ち神事」が行われることから、行われていた祭りも含めて推測すると元々は「薙鎌神社」であったと考えられる。現地には巨石の前に鳥居が建ち、その脇には石灯籠のようなものが建てられているのみで、非常に簡素なものである。水の信仰に結び付くようなものは確認されなかった。



地図 5

国土地理院地図を加工して作成



写真⑥「苗鎌神社」



写真⑦「苗鎌神社鳥居の看板」

(2) 龍に関わる文化財・伝説等の所在調査

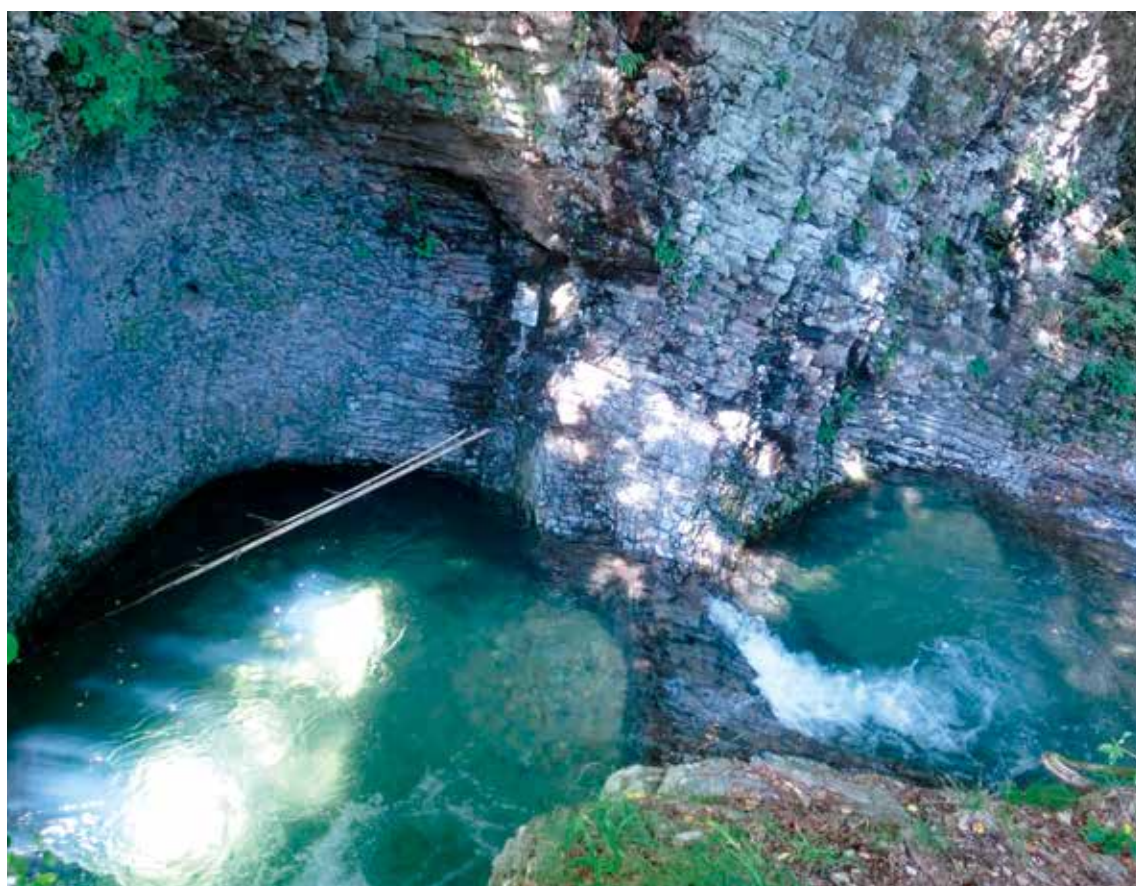
① 稚児ヶ淵

昨年度の調査の折には判明していなかったが、「不明門（あかずの門）」に龍伝説が残る霊泉寺の近くに、もうひとつ「龍」の伝説が採集できたため、ここで紹介する。ただし、龍が水神として扱われるものではなく、どちらかという人間に悪さをする存在として描かれていることは、「不明門」に登場する龍との関連をうかがわせるものである。



地図 12

国土地理院地図を加工して作成



写真⑧ 稚児ヶ淵

稚児ヶ淵

霊泉寺は、鎌倉の建長寺の末寺として、開山されました。

そのころ、ここにはたくさんのお坊さんがいました。その中には、大きくなったら立派なお坊さんになろうという修行中の小僧さんも大勢いて、その小僧さんは稚児僧と呼ばれました。その中の一人のお稚児さんは、和尚さんの言いつけを守り、朝早くから夜おそくまで、よく勉強したり気持ちよく仕事をしたので、みんなにとっても可愛がられ大事にされていました。

ある晩のことです。いつものようにお経をすませましたが、寝るにはまだ早いので、庭に下りてみました。よい月夜でした。池のそばまで来たとき、そこに美しい娘がにっこり笑って立っていました。お稚児さんは、びっくりしました。むかしのお坊さんには、厳しいきまりがたくさんありました。酒を飲まない、肉を食べない、女の人とはいっしょに住まない、などです。お稚児さんは、目の前の美しい娘さんを見てあわてておじぎをすると、くるりと後ろを向いてお寺に帰りました。だれか見ていなかっただろうか、胸がドキドキしました。

さて次の晩、お稚児さんは、夜のお勤めをすますとまた池まで歩いて行きました。あの美しい娘さんが忘れられなかったのです。娘はにっこり笑って、待っていました。そして三日目、どちらからともなく言葉を交わすようになり、それから夜のお勤めがすむと庭に出て、娘と会うのを楽しみにしていました。娘と会うようになってから、お稚児さんは笑わなくなり、友だちとも話をしなくなりました。お寺の人たちは首をかしげ、どこか体でも悪いのではないかと心配しました。

いく月か過ぎたある晩、二人が星を見ながら話をしているところを兄弟子の僧に見つかってしまいました。そして和尚さんの耳にも入り、お稚児さんはお寺の本堂に閉じこめられ、厳しい見張りをつけられて、外へは一步も出してもらえなくなりました。和尚さんからは、「あの娘は人間ではない。人間に姿を変えた魔物だ。忘れなさい」と、さとされました。でも、どうしても忘れることはできませんでした。

ある晩、見張りの寝こんだすきを見て、本堂をぬけ出ると、庭の木のかげで娘が手招きしています。喜んで、娘の手招きにひかれて霊泉寺川の淵まで来たとき、ふっと娘の姿が消えました。谷川のさらさらと流れる音と、夜風にゆれる木々の音だけが聞こえています。はてなと、川の底をのぞいてみると、こいしい娘が手招きしているではありませんか。お稚児さんは、なんのためらいもなく、娘のところに飛び込んでいきました。お稚児さんのいなくなったお寺では、大さわぎでした。どこを探しても見つかりませんでした。次の朝になって、霊泉寺川の、大きなうずまきにまかれながら、浮いているお稚児さんが見つかりました。ほほえんだやさしい顔をしていたそうです。

その後、この淵の主の竜が娘に化けてお坊さんを取りこにしたのだと、お寺の人たちや村の人たちがうわさするようになり、だれ言うとなく、この淵を「稚児ヶ淵」と呼ぶようになりました。

(出典：『ふるさとの民話と伝説』『丸子町誌』民俗編 丸子町（1992）に掲載から引用）

② 鹿教湯温泉の由来と「天龍寺」

鹿教湯温泉の名称の由来については、鹿に姿を借りた文殊菩薩の伝説が知られているが、これに関連して、鹿教湯温泉の天龍寺に関連して「龍」の伝承が伝えられているので紹介したい。霊泉寺周辺で見られる「龍」が人に危害をもたらすものとしてではなく、神秘的なものとして伝えられているところが大きく異なり、むしろ「温泉」ではあるものの、「水神」に近い立場で描かれている点に注目したい。

鹿教湯

行基菩薩の御弟子に円行という僧がいた。ある時、円行は、行基に次のようなお願いをした。「私に、月の誓願があります。一仏をおつくりになられて、私にお与えください。」と。行基は、円行の熱心さに感じて、分殊菩薩の一仏をつくって、円行に与えた。円行は、今私の願いがなかったとたいへん喜んで、行基にいとまごいをして、他国に行脚することになった。

そして、円行は信濃の国筑摩郡の国府に到着した。お釈迦様も涅槃が、のがれなかったように、命の定めなきことには、驚かないが、疾病がしきりに五体をなやまし、心苦しむこと安らかでなく、まどろむこともできなかった。

そこで、円行は文殊一仏を枕元に置き、一心に念じ奉るよりほかに、しょうがなかった。

仏の御慈悲は、蒼海よりも深いので、円行の病苦を哀れと思われ、新たによいことを霊夢としてお示しになられた。

その霊夢は、次のようなものであった。

「この国の東方、七、八里行った所に温泉がある。その温泉に入って病をなおすがよい。」

円行は、夢からさめて、早く起きて、教えのように東方、七、八里の所に行くと。そこには本当に温泉があらわれた。この温泉に朝と夕に入ると、日一日と身体が健康に向かい、わずか七日間で病気が完全に治り、元の健康に戻った。円行の喜びようは、殊の外であり、そのありがたさを肝に命じた。円行はありがたさと共に、たいへん不思議に思い、その村に住んでいる老翁に、この湯には何かいわれがあるのではないかと問うてみた。老翁は謹んで、次のような伝承のあることを申し上げました。

「昔は、この辺りは森林が生い茂り、谷が深く、人跡未踏の地であり、岩がそびえて山が高く、谷深くして、鳥さえも鳴かず、さえずらなかった。そんな道を仲秋三五の頃に、狩人が来て、谷にさがったり、丘にのぼったり、あちらこちらと歩いていくと、ちょうどその時、鹿が谷をのぼっていくのに出合った。狩人は直ちに、一矢を放つと、ねらい定まり、鹿の越のあたりを貫いた。早速、この鹿を捕えようとしたが、その鹿が走り出し、近づくことができず、ついにその行方を見失ってしまった。翌日、一矢を放った所に行き、血のしたたりをたどって、鹿のありかを探していくうちに、湯口に出た。よく見ると、昨日矢を受けた鹿は、この湯口にて矢に当たった傷を、湯でよく洗っていると傷はすぐになおし、元通りに元気になっていた。その鹿は、狩人の弓のかげが湯にうつったのをみると、早く走り出し、逃げていってしまった。狩人は、鹿を追い幽谷に入って探したが、どこにもいなかった。狩人は、むなしく手にするものは、何もなく里に帰ってきた。そして、狩人は、この出来事を友だちに話した。世話の人、このことを聞き伝えて、病気になった者は、この湯に入ると、必ずよくなった。わずかに入っても、たいへんな効きめがあらわれた。こんなわけで、この湯のことを、鹿が教えた湯なので『鹿教湯』と名付け、伝えられてきています。」

円行、老翁の語るところ、いつわりなしと思い、仏の不思議な力を感得したという。

さて、そこで、文殊菩薩の一仏を安置するところはないものかと、あちらこちらを尋ねていたところ、老翁が来て、次のようなことを語った。

「毎晩、夜がふけると、東の山から一燈出てきて、光を放ち、雲の中を飛び、電光の如く、金の縄をひくに似ている。そして、この庵の前の樹上にとどまり、しばらくして、かさの如くにして上をおおう。そのあと溪川の淵に入って消えてしまう。」

円行は、私が拝んでいる一仏は、行基菩薩、一刀三礼の尊像なるゆえに、水神が龍燈をささげ奉るにちがいないと思い、信心いよいよ厚くした。これから、ますます仏に帰依することを願い、ここを霊地にしようとし、小さな茅ぶきの建物をつくり、文殊菩薩像を安置し奉る。これを大智山天龍寺と名付けることにした。

(出典：『大智山天龍寺縁起』『丸子町誌』民俗編 丸子町(1992)に掲載から引用)

(3) 太陽信仰に関わる文化財、伝説等の所在調査

①天照大神を祀る社、大日如来の分布調査

今回の調査において、鹿教湯温泉地区で天照大神を祀る社は確認できなかった。大日如来については、鹿教湯温泉地区を中心に新たに5件の所在を確認した。

1. 大日如来（肉彫像）

（カード番号）108

（所在地）寺沢

（寸法）高さ134（123）cm・幅26cm・厚17cm

（造立年）享保17年（1728）

（文字）享保十七壬子四月三日 / 入塔身了皆全浄人 / 齋藤平右衛也



国土地理院地図を加工して作成



写真⑨「大日如来（肉彫像）」

No. 108		石造文化財調査カード				昭和 年 月 日		記録者	
所在地	西内区 寺沢 (文殊堂境内)	種別	石 仏	品名	大日如来	現状			
寸法	高 134 (123) cm	幅 26 cm	厚 17 cm	造立年	享保17年4月3日 (1728)	塔形			
銘文 (縦書)		由来・特色・その他		写真 (略図)		所在地略図			
裏 左 横 表 大日如来 享保十七壬子四月三日 入塔身了皆全浄人 齋藤平右衛也		上屋は入湯客の寄附により 建てられたと云う。 齋藤英孝宅(かじや旅館)の先 祖の建てたものでありと云うが、 由来、言い伝え等失ってはいない。				No. 108-3 参照			

2. 大日如来（肉彫像）

(カード番号) 116

(所在地) 十二

(寸法) 高さ (50) cm・幅 25cm・厚 8cm

(造立年) 不明

(文字) なし

(その他)

本像が祀られている場所は「大日如来遺跡」と呼ばれる縄文時代・平安時代の遺跡である。遺跡名は地字を冠するのが一般的であるが、敢えて「十二遺跡」ではなく「大日如来遺跡」と命名した背景には、この大日如来像が地域住民から親しまれ、身近な存在であることが窺えよう。



写真⑩「大日如来（肉彫像）」



国土地理院地図を加工して作成

No. 116		石造文化財調査カード				昭和 年 月 日 記録者	
所在地	西内区十二	種別	石像	品名	大日如来	現状	
寸法	高さ (50) cm 幅 25 cm 厚 8 cm	造立年	()	塔形			
銘文 (縦書き)		由来・特色・その他		写真 (略図)		所在地略図	
裏 左 横 右 表		千曲バス車庫から西へ約30m 国道沿い、隣りに墓石が あり、一部はコンクリートで作り られている。					

3. 大日如来（肉彫像）

（カード番号）123

（所在地）下原

（寸法）高さ 49(38)cm・幅 26cm・厚 12cm

（造立年）文政元年（1818）

（文字）文政元年／六月吉日



国土地理院地図を加工して作成



写真⑪、写真⑫「大日如来（肉彫像）」

No. 123		石造文化財調査カード				昭和 年 月 日 記録者			
所在地	西内区下原		種別	石 仏		品名	大日如来	現状	
寸法	高 49(38)	幅 26	厚 12	造立年	文政元年6月 (1818)		塔形		
銘文（縦書）		由来・特色・その他		写真（略図）		所在地略図			
裏 左 横 右 表 (裏) 文政元年 六月吉日		清遊園の庭一番奥にあり 以前は二体有りたが一つの 間に氷溜りしたと云う。 (M群A-2)				No.123-2 参照			

4. 大日如来（肉彫像）

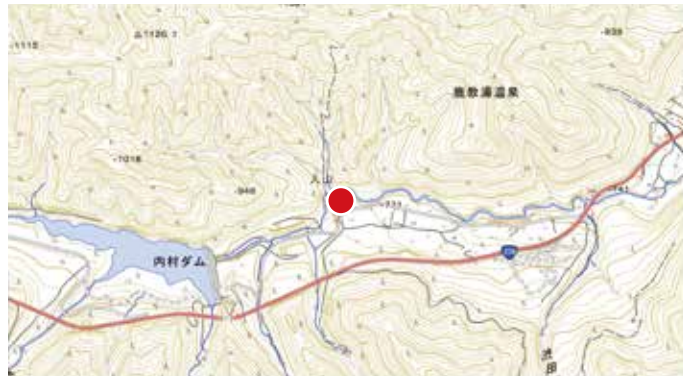
(カード番号) 124

(所在地) 上原

(寸法) 高さ 53(45)cm・幅 24cm・厚 10cm

(造立年) 不明

(文字) なし



国土地理院地図を加工して作成



写真⑬、写真⑭「大日如来（肉彫像）」

No. 124		石造文化財調査カード				昭和 年 月 日		記録者
所在地	西内区上原	種別	石仏	品名	大日如来	現状		
寸法	高さ 53(45)cm	幅 24cm	厚 10cm	造立年	()	塔形		
銘文(縦書き)		由来・特色・その他		写真(略図)		所在地略図		
裏 左 横 右 表		台座は自然石、太い松の木(低い)の下に在る。						

5. 大日如来（文字塔）

（カード番号）記載なし

（所在地）雀原

（寸法）高さ42(30)cm・幅18cm・厚12cm

（造立年）文化14年（1817）

（文字）文化十四年／三月十八日



国土地理院地図を加工して作成



写真⑮、写真⑯「大日如来（文字塔）」



また、今回の調査においては降雪のため足場が悪く、現地へ赴くことは叶わなかったが、以下の2件も過去の調査によって確認されている。

6. 大日如来（肉彫像）

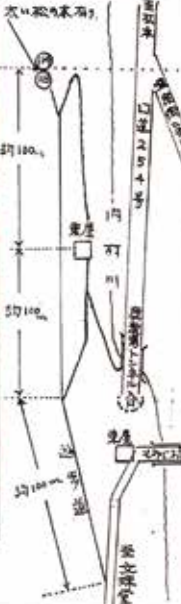
（カード番号）113

（所在地）寺沢

（寸法）高さ 61(41)cm・幅 28cm・厚 15cm

（造立年）天明3年（1783）

（文字）天明三卯年 / 得入自船禅定門 / 十二月十二日行者宇兵衛

No. 113		石造文化財調査カード			昭和 年 月 日		記録者	
所在地	西内区寺沢		種別	石 仏	品名	大日如来		現状
寸法	高 61(41)	幅 28	厚 15	造立年	天明3年12月12日 (1783)		塔形	
銘文（縦書）		由来・特色・その他		写真（略図）		所在地略図		
裏 左 横 (裏) 得入自船禅定門 十二月十二日 行者宇兵衛 天明三卯年		紅葉橋附近から山の方へ300 所位入った所に在り。このから 国道を見ると、温泉街からの道 との合流点あたりになる。 この行く道は平らで音 信越線も引く計画のある 時の測量をした道であると云						
No. 114-2参照								

7. 大日如来（文字塔）

（カード番号）114

（所在地）寺沢

（寸法）高さ 75(65)cm・幅 33cm・厚 22cm

（造立年）寛政5年（1793）

（文字）寛政五年 / 南無大日如来 / 亥七月



国土地理院地図を加工して作成

No. 114		石造文化財調査カード				昭和 年 月 日		記録者	
所在地	西内区 寺沢		種別	石 仏		品名	大日如来		現状
寸法	高 75(65)	幅 33	厚 22	造立年	寛政5年7月 (1793)		塔形		
銘 文 (縦書)			由来・特色・その他			写 真 (略 図)		所在地略図	
裏 左 横 右 表 (表) 南無大日如来 寛政五年 亥七月			No. の隣り 3.5m の所に在る。					No. 113 参照	

② 平井区公民館仏像調査

（寺堂名）平井区公民館

（名称）薬師如来坐像

（製作年代）江戸時代 18 世紀

（法量）像高 31.9cm・髪際高 27.4cm

（形状）木造・寄木造・玉眼

（表面仕上）全身漆箔

（その他）檜材・厨子入り



写真⑰「平井区公民館薬師如来坐像」

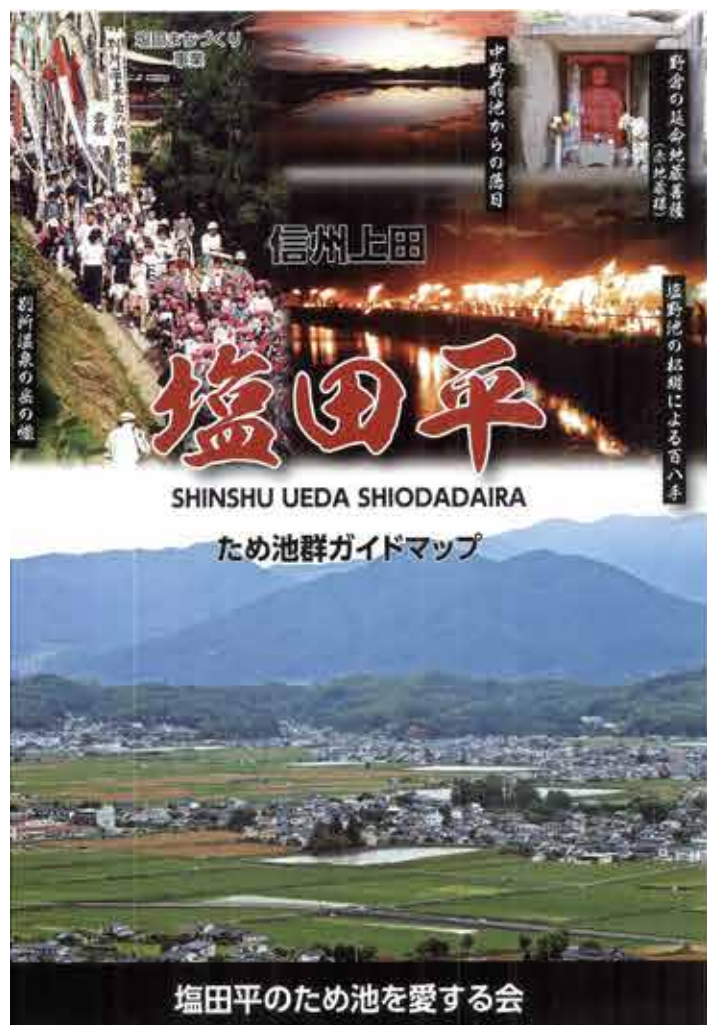
3 塩田平のため池群に関する補充調査

塩田平には現在、『上田市誌別巻 2』「図でみる街や村のうつりかわり」によると塩田地区だけでも239箇所のため池があり、かつては300箇所を数えるなど、全国的に見ても非常に数が多い地域として捉えられる。塩田平におけるため池の成り立ちについては後述するが、南方に連なる独鈷山系の山々が、急峻で降雨後の保水力に乏しく（これを塩田平の皆さんは「山が浅い」と表現する）、山麓が扇状地であることから大きな河川も存在しないため、山裾に土堤を造って山からの冷えた湧水を貯め、温めてから水田に通水していたと伝える。

先述したとおり、令和2年に認定された上田市の日本遺産では、ため池についてはそれに付随する伝説等も含め、独鈷山、夫神岳、産川などと同様に認定ストーリーを語る上で必要な背景として位置づけている。認定申請当初には、239箇所のため池はそれぞれの歴史的経過や付随する環境も異なり、それぞれを個々に構成文化財とすることは難しいと考えたからである。また、100を超える構成文化財をカウントすることも、地域型での認定を目指す中で違和感があったことも事実である。

しかし、古くは真田氏の時代に築造されたとも言われ、江戸時代に上田藩・仙石氏の農業振興政策で推進されたため池の築造の歴史を評価し、その価値と魅力について発信するために、構成文化財として位置付けて積極的に活用していきたいとの地元からの要望を受け、補充調査を実施し、構成文化財としての認定を目指して準備を進めたものである。

補充調査はこれまでの「塩田平のため池を愛する会」ほかの調査・研究の成果をまとめたほか、木樋などの遺物についても現地調査を実施した。その結果、次に示すような成果を得て、個々の「ため池」としての活用ではなく、「塩田平のため池群」として捉えることで、面的な活用に向けて取り組むことが出来るのではないかと考えた。なお、本調査の成果をもって、今年度、構成文化財の追加認定を申請することとした。



資料① 塩田平のため池を愛する会パンフレット

令和3年度の補充調査で明らかになったこと、また、これからの課題を整理して、本書のまとめとしたい。

1 レイラインに関する現地調査

レイライン上に存在する神社等については、ある程度の悉皆的な調査を終えたことから、今回の報告で一応の一区切りとしたい。

今回の補充調査の中で、認定エリアの丸子温泉郷地域の特産品である高麗人參（または朝鮮人參、薬用人參とも）の作り方について、興味深い情報を得た。人參の生育のために、畑では畝の方向を「夏至の日の入り」の方向と合わせたというのである。高麗人參は半日陰を好むため、片屋根式の上屋をかけて栽培するが、日中の直射日光、特に夕日の差し込みは人參の生育に大きな影響を与えるため、これを防ぐためにとられた方策である。おそらくこれは一例であり、レイライン周辺では、住民が太陽を意識して暮らしてきたことは想像に難くない。来年度以降はこうした民俗学的な事例を採集することで、レイラインと地域とのつながりについて調査・検討をしてみたい。

2 西内地区の水・太陽に関する信仰

(1) 水の信仰に関する所在調査

今回は昨年度実施できなかった洪田見山山頂付近の万年九郎沼及び万年九郎沼大明神の現地調査と、里宮の現地調査を行ったが、鹿教湯温泉側から洪田見山への傾斜はかなりあり、容易に登ることはできない印象を受けたが、それほどの山頂付近に自然と水が湧いていることは、信仰の対象となりうる珍しい現象であることは現地で感じた。これまでの調査から、この地域は中央に内村川が流れ、塩田平ほど稲作に適した平地がないことから、水に関する信仰はかなり少ないと考えていた。しかし、珍しい現象であるが、鹿教湯温泉からの比高が700mもの地点に石祠を造営し、年に一度祭事を行っており、それが難しくなってからも廃止ではなく里宮を造営し、祭事を続けてきたことを鑑みると、一定の水に対する信仰があったものと考えられる。現在は行われなくなってしまったこと、万年九郎大明神以外に水の信仰に関する情報が確認できなかったことを考えると、やはり塩田平等の地域に比べるとこの地域は水の確保に苦労している地区ではないことが考えられる。

しかし、万年九郎大明神の祭事が行われなくなっていること、かつての薙鎌神社が苗鎌神社へ変わっていていることを考えると、かつて水に関する信仰が複数あったものの、現在まで伝えられていなかったり、名称や形が変わってしまったりしているものもある可能性が考えられる。今後も調査を続けることにより、そういった過去の信仰についても明らかにしていきたい。

(2) 龍に関わる文化財・伝説等の所在調査

独鈷山の北側に位置する塩田平で「水神」として扱われている龍の姿が、南麓の丸子温泉郷においても共有されているか否かについて昨年度から調査してきたが、隣接する松本・安曇野地域の「犀龍」との近似性だけでなく、塩田平に見られるような、「水神」としての龍の姿を伝える伝説も存在することが判明した。

上記(1)で述べたように、比較的水が潤沢な内村川の存在や、雨乞い行事が変容または消滅してしまっている可能性もあり、「水神」としての龍の伝説等が失われてしまっていることも考慮すべきではない

かと考える。今後は、調査範囲をさらに東に広げ、龍に対する信仰について調査を進めていきたいと考える。

(3) 太陽信仰に関わる文化財、伝説等の所在調査

今回は西内地区と鹿教湯温泉地区の大日如来の分布調査を行ったが、昨年度の平井地区が16件に対し、西内地区および鹿教湯温泉地区は7件（現地確認ができたのは5件）と隣り合う地区だが半数程度であった。その分布をみると、1件を除き内村川右岸に集中し、洪田見山の南麓に位置するものも4件ある。その理由については明らかではないが、昨年度の調査結果も踏まえると、独鈷山の影響も考えられる。そういった昨年度及び今年度実施した調査に基づく住民の信仰については、今後の研究に期待したい。

また、5の雀原にある大日如来については、近年の治山工事の際に発見されたもので、それまで全く知られていなかった。その他の石造物についても同様であるが、現在ではほとんど管理されていないものがほとんどで、保存活用状況は良いものとは言えない。今後日本遺産推進事業等によって「地域住民が身近な文化財の価値と魅力を知って、これを発信していく」取り組みが進み、石造文化財等についても保存活用が図られることが望まれる。

平井区公民館内に安置されている仏像は、調査の結果、薬師如来であることが判明し、太陽信仰に結びつくものではなかったが、江戸時代から地域の住民によって大切に守られてきたものであり、破損箇所が見られるものの、屋内に保管されていることから、今後も地域の宝として保存活用が図られることが望まれる。

3 塩田平のため池群に関する補充調査

「塩田平のため池を愛する会」によるため池の調査は、塩田平土地改良区の「ため池データベース」に登録されている41のため池の規模、成り立ち、特徴、伝承、周辺環境等を調査したもので、比較的大規模なため池を対象に行われた。その結果、これらの多くのため池築造や大規模補修等については、藩や自治体が主で行っているものの、作業への参加や日常的な維持管理は周辺住民（自治会）によって現在まで継続的に行われていることが分かった。また、「手洗池」や「舌喰池」「不動池」など多くの池で伝説や伝承が確認されているほか、「マダラヤンマ」などの貴重な動植物の生息地、百八手を行ったり仏像等を投げ込むなどの雨乞い行事の場としても使用されている。

また、それ以外の個人所有等の小規模なため池の数については規模や形状等について明確な基準がないため、個人所有の小規模のものを含めて正確に算出することは現状難しい。今年度、地目が「ため池」となっている地番を抽出し、航空写真や地図等と照合することにより、ため池のリストアップを行った。しかし、現地確認を要するものが多いため、来年度以降現地調査を実施し、その数を確定させていく必要がある。

小規模なため池の数の把握は今後の調査成果を待たれるが、塩田平のため池数はかなりの数になることが今回の調査で明らかとなった。小規模なため池に個人や周辺住民の維持管理によって成り立っており、ため池は単に水田用水の確保ではなく、塩田平の住民の生活の一部でありアイデンティティとなっていることが確認された。

したがって、日本遺産においても大規模のため池を個別に焦点を当てるのではなく、これまで塩田

平の住民が生活のために相当な苦勞によって多くのため池を築き、維持されてきたことに注目し、「ため池群」として面的な保存・活用が行われるべきである。

今回の調査を実施するにあたり、文化庁をはじめ、長野県教育委員会のほか、資料提供、聞き取り調査等で大勢の皆様にたいへんお世話になりました。厚く御礼を申し上げます。今後もよりいっそうの御厚情を賜りますよう、お願い申し上げます。

〈参考・引用文献〉

『鹿教湯の里』 斎藤守 1976

『丸子町誌』 民俗編 丸子町 1992

『丸子町誌』 歴史資料編 丸子町 1992

『上田・小県地方の「地字略考」』 五十嵐幹雄 1996

『令和2年度 上田市日本遺産補充調査報告書』 上田市日本遺産推進協議会 2021

参考資料

令和 2 年度日本遺産認定申請書から抜粋

様式 3-1 構成文化財一覧表

様式 3-2 構成文化財写真一覧

※写真は一部変更しています

ストーリーの構成文化財一覧表

番号	ふりがな 文化財の名称 (※1)	指定等の状況 (※2)	ストーリーの中の位置づけ (※3)	文化財の所在地 (※4)
■「信州の学海」				
1	あんらく じ はつかくさんじゅうのとう 安楽寺八角三重塔	国宝	中国から伝わった「禅宗様」で造られた、現存する日本唯一の木造八角三重塔で、長野県の「国宝第一号」。かつては「四重塔」とされたが、現在は一番下の屋根は裳階（ひさし）と解釈されている。禅宗寺院であるにも関わらず一層内部に大日如来像が安置されており、太陽信仰との関連をうかがわせる。 創建は1290年代とされ、八角形のどっしりとした落ち着きがある塔で、頂上には相輪が青天高くそびえている。屋根の下の華やかな木組みも相まって、安定感と崇高美、華麗さを兼ね備えた、天下の名塔である。	
2	もくぞう い せんおしょう ざ ぞう 木造惟仙和尚坐像・ もくぞう え にんおしょう ざ ぞう 木造恵仁和尚坐像	国重文	安楽寺の創立は慈覚大師ともいい、宗派は天台あるいは律宗とも考えられている。その後、信濃出身の僧・樵谷惟仙が臨済寺院として中興開山した（現在は曹洞宗）。境内の伝芳堂に、惟仙と開山二世幼牛恵仁の等身大の僧侶の椅像「頂相」が並んで祀られている。没後、弟子たちがその徳を慕い造立したもので、安楽寺が鎌倉と同水準の禅宗文化を受容し、「信州の学海」として、修行僧を多数輩出していたことがうかがえる。	
3	じょうらくじほんどう 常楽寺本堂	市建造物	天台宗別格本山。平安時代初めに慈覚大師が開創と伝え、樵谷惟仙をはじめ、多くの青年僧が学んだ「信州の学海」を支えた寺院として名高い。 本堂は寄棟造、茅葺の建物で、江戸時代中期後半の建築で、本尊は大日如来の五つの智慧を表す五智如来の一尊である妙観察智阿弥陀如来である。	

4	じょうらくじせきどう た ほうとう 常楽寺石造多宝塔	国重文	石造多宝塔は弘長2年(1262)の作で、総高274.0cmの重厚で堂々とした風格や造り方は鎌倉期多宝塔の優品。塔が建てられている所は、北向観音の出現地といい、境内でもっとも神聖な場所とされる。 多宝塔は大日如来を具現化したものとされ、太陽信仰の一端をも垣間見ることができる。	
5	きたむきかんのんどう 北向観音堂	未指定 (建造物)	平安時代初期に比叡山延暦寺座主慈覚大師円仁が開いた霊場。北向きの本堂(本尊は千手観音菩薩像)は全国でもほとんど例が無く、南向きの善光寺本堂と相対している。「極楽往生」を願う善光寺と「両参り」し、ここで「現世利益」を祈ることで、御利益があるとされる。 かつて参道脇に長楽寺(常楽寺、安楽寺とともに天台宗の「別所三楽寺」のひとつ)があったが、現在は常楽寺を本坊とする。昭和36(1961)年に善光寺本堂と同じく、「撞木造り」の建物として増改築された。なお、手水舎には境内から湧出している温泉が使われている。	
6	ぜんこうじ じ しん え ま 善光寺地震絵馬	未指定 (有形民俗文化財)	「善光寺だけでは片参り」のいわれを伝える絵馬。北向観音で厄除札を受けた後、善光寺御開帳に向かった尾張の市之助が、門前宿で弘化4(1847)年の善光寺地震に遭遇した際に、北向観音で受けたお札が身代わりになってくれたおかげで、災難を逃れたという伝説を描いている。	
7	あいぜん 愛染カツラ べっしょ ご ぼく (別所五木)	市天然記念物 (未指定) (天然記念物)	神仏が姿を現した「影向の桂」といわれる霊木で、目通り幹囲5.8mの太さがある。ハート形の葉が珍しく、故川口松太郎原作の日活映画『愛染かつら』のモデルとなり、今でも縁結びの霊木として老若男女に親しまれている。 別所温泉には他に、北向観音の夫婦杉〈夫婦円満〉、薬師堂のねじり紅葉〈素直な心〉、常楽寺の御船の松〈極楽浄土に導く〉、安楽寺の高野槇〈希望〉の霊木があり、「別所五木」と呼ばれて親しまれている。	

8	まい た せきぞう ごりんとう 舞田の石造五輪塔	県宝石造物	五輪塔は、はじめ大日如来を尊ぶことから造られたといい、その後、身分が高い人の供養塔として用いられるようになった。総高 212cm の鎌倉時代の五輪塔の優品で、塩田平にたくさんある石造文化財の中でもひととき目立つ雄大な塔だ。 地輪、水輪、火輪、風輪、空輪からなり、本例は風・空輪が一石で造られている。水輪には梵字「バン」(大日如来)が刻まれている。各部材の様式等からみて、鎌倉初期の建立と推定されている。 文治 2 (1186) 年この地に金王庵を創建した渋谷土佐入道昌順の墓塔と伝えられている。	
■神宿る「山」への祈り				
9	ぜんさん じ さんじゅうのとう 前山寺三重塔	国重文	前山寺は塩田城の祈願寺と伝えられ、本尊は大日如来。三重塔は室町時代初期の造立とされ、初層と二層に掲げられた大日如来の額で金剛界五仏を表す。二層・三層目の勾欄が未完成であるにも関わらず、何の不調和感もなく、「未完成の完成塔」と絶賛される。荘厳な九輪の下、柿葺きの屋根が重なり合った美しい曲線が四季の山色に映え、その姿は、名塔の誉れを欲しいままにしている。 真言宗の「信濃の四談林」のひとつであり、三楽寺とともに「信州の学海」としての役割を担った。	
10	いし さん ち ちがい石とその産地	市天然記念物	「ちがい石」は、2 つの中性長石が X 形に交わって晶出した鉱物で、ここ弘法山でしか産出しない。「誓い石」とも呼ばれ、弘法大師空海が「大切に保持すれば災厄から免れさせる」ことを誓ったという伝説を秘める。	
11	さいこうじ あみだどう 西光寺阿弥陀堂	県宝建造物	弘法大師空海が大日如来像・阿弥陀如来像を彫刻し、小堂を建てたのが開創と伝え、鎌倉時代に塩田北条氏が開基となり、足利から実勝和尚を招いて開山とした。阿弥陀堂は室町後期の寄棟造の建物で、飾らない檜皮葺のシルエットが美しい。	

12	ちゅうぜんじやく し どう 中禅寺薬師堂	国重文	約800年前の建物と推定される中部日本最古の木造建築で、塩田平に仏教文化が根付いた時期を示すものだ。 宝形造の素朴な茅葺屋根と青空とのコントラストが美しい。薬師如来像を祀る「薬師堂」であるが、「方三間の阿弥陀堂」形式の不思議な建物だ。	
13	ちゅうぜんじもくぞうやく し によらい ざ ぞう 中禅寺木造薬師如来坐像	国重文	薬師堂の本尊で、平安時代後期（藤原期）の「定朝様」に進取の鎌倉様式を取り入れた、いわゆる「藤末鎌初」の仏像。像高は97.8cmで、その台座（受座）には流鏑馬を描いた墨書戯画が見られる。塩田平に鎌倉から流入した仏教文化の影響を示す作品である。	
14	ちゅうぜんじもくぞうこんごうりき し ぞう 中禅寺木造金剛力士像	県宝彫刻	薬師堂仁王門に安置された、平安時代末の信州最古の金剛力士像。寄木造で像高207cmのやや小振りの像だ。制作時期は薬師堂本尊とほぼ同じとみられ、この像から、当時、中禅寺が進取の様式により伽藍を整えていたことがうかがえよう。	
15	まえやましお の じんじゃ 前山塩野神社 はいでんおよ ほんでん 拝殿及び本殿	市建造物	「延喜式」等に記載の古社で、独鈷山の北麓に鎮座し、かつては山上の鷲岩という巨岩に祀られていたという。 棟札から、拝殿は寛保3（1743）年のものとみられ、二階建ての「楼門造り」という珍しい建物だ。また、本殿は寛延3（1750）年の建築と考えられ、「一間社流れ造り」の様式で、見事な龍の彫刻が目目を引く。 神が降る岩「磐座」と境内を流れる塩野川は、異空間に迷い込んだような錯覚を覚えさせる。	
16	ほうじゅうじ こ く ぞうどう 法住寺虚空蔵堂 つけたりず し 附 厨子	国重文	平安時代に創建されたと伝える天台宗の古刹。独鈷山を主峰とする虚空蔵信仰の山麓寺院（南麓）として捉えられる。堂全体は「和様」で造られているが、懸魚などには「禅宗様」の要素も見られ、室町時代中頃に造られた建物と考えられる。 厨子の時代はお堂と同じ頃と考えられ、方一間入母屋造という禅宗様式独特の方式で造られている。中には虚空蔵菩薩坐像（室町時代・寄木造・像高45.4cm）が安置されている。	

17	べっしょおんせん たけ のぼりぎょうじ 別所温泉の岳の幟行事	国選択無形 民俗文化財	永正元（1504）年に大旱魃に苦しんだ農民が、雨の神様に貴重な反物をささげて祈ったことが始まりとされ、嘉永2（1849）年「善光寺道名所図会」にも記される雨乞いのまつりである。 本来は7月15日が祭日であるが、現在はそれに近い日曜日に行く。天に昇る龍を象った幟は、長さ約6mの青竹竿に赤・青・黄などの色鮮やかな布が取り付けられている。 夫神岳の頂上に祀られた「龍”オカミ”」九頭龍神の祠で住民代表が神事を行った後、降り龍の幟を先頭に70本もの幟が山を下る。麓で別所神社の神主総代や三頭獅子とささら踊りの一行と合流して温泉街を一巡する。 平成10（1998）年に開催された長野冬季オリンピックの閉会式会場でも披露された。	
18	べっしょじんじゃほんでん 別所神社本殿 かぐらでん (神楽殿) ほんちょうえんむすびおおかみのほくら (本朝縁結大神祠)	市建造物 (未指定) 建造物 (未指定) 建造物	別所温泉の北方、塩田平をはじめ遠く浅間連峰が望める小高い丘にある産土神。岳の幟行事の終着地である。 建物は天明8（1788）年のものと思われる、安楽寺の山門など、塩田平の神社建築に多くの優れた作品を残した、上田房山の末野一族の手によるもの。 なお、境内の立派な神楽殿や、本殿の背に祀られる「本朝縁結大神」なども貴重な文化財だ。	
19	くら ふち じゃこつし 鞍が淵と蛇骨石	未指定 (名勝・天然記念物)	鞍が淵の名は、独鈷山から落下した2つの大岩が折り重なって鞍のように見えることが由来だ。岩の間を流れる産川が造る淵には、かつて大蛇が住んでいたという。周辺で採取される蛇骨石（灰沸石）は独鈷山の岩石に含まれる鉱物で、色と形がヘビの骨に似ていることからこの名がある。 「小泉小太郎」とは、大蛇を母とする大柄な男の子で、産川（鞍が淵）は小太郎が産み落とされた場所。この伝説は、大蛇は水の神であり、産川の源である独鈷山が水神として崇められていたことをうかがわせる。小泉小太郎伝説は、松谷みよ子の「竜の子太郎」のモデルとなった。	

■祈りの言葉は「アメフラセタンマイナ」			
20	せん だ だ 千駄焚き・百八手	未指定 (無形民俗文化財)	日照りの年に、山頂やため池の土手で、松明を点したり、藁の束などに火をつけ、「雨降らせタンマイナ」と唱える雨乞いの習俗である。祈りの方法は集落やため池ごとに、若干の違いがある。
21	な ら お せきぞうおお ぼ ぞう 奈良尾石造大姥坐像	市彫刻	大旱魃の際に、富士嶽で雨乞いをしたところ、忽ちのうちに雨が降ったので、御礼として、寛正7年(1466)に造られたものという。その後、「祈りのかたち」は、この石像に願掛けをした千駄焚きや、石像を池の中に放り込むなどに変化した。祈りの言葉はここでも「雨降らせタンマイナ」だ。 怖い顔に反して「大姥さま」と親しみを込めて呼ばれる像は、写実的で迫力を感じる見事な石像である。
22	ほ や き おんさい 保野の祇園祭	市指定無形民俗文化財	保野の集落は、中世には三斎市が立った塩田平の経済を支えた場所として知られる。保野塩野神社の祇園祭は、大凶作でまつりを休んだところ、疫病が大流行したため、その後は凶作でも休まずに続けてきた。 仮宮の市神に移られたお旅所前と、翌日午後に本社に帰られた広庭で、早乙女の揃い姿で踊るささら子の踊りと天狗と雄獅子2体、雌獅子1体による獅子踊りが舞われる。 凶作が行事の存続に関与した事例として注目されるまつりだ。
■未来への懸け橋			
23	し な の こくぶん じ あと 信濃国分寺跡	国史跡	天平13(741)年の「国分寺建立の詔」により、信濃国分寺は上田に造られることとなり、770年頃には伽藍が整備されたと推定される。寺伝には、承平8(938)年の平将門と平貞盛の戦いの際に兵火で焼失したとある。 昭和38(1963)年から46年に行われた発掘調査では、全国的にも稀な僧寺と尼寺が並ぶ伽藍配置と瓦、什器などの遺物が検出されるとともに、10世紀頃の衰退の痕跡をも確認するなど、大きな成果を残した。この結果を元に史跡公園として整備された。 寺域の東北隅の高台に鎮座する国分神社が、レイラインの起点となる。

24	しなのこくぶんじほんどう 信濃国分寺本堂	長野県宝	天台宗の寺院で、本堂は薬師堂と呼ばれている。現在の信濃国分寺の境内は、天平の伽藍の北側の一段高い場所に、かつての僧寺と主軸線を合わせて整備されている。 万延元（1860）年に竣工し、彫工は地元上沢村の竹内八十吉であり、龍や鳳凰の彫刻が見事である。	
25	しなのこくぶんじさんじゅうのとう 信濃国分寺三重塔	国重文	寺伝では、建久8（1197）年に源頼朝が善光寺参詣の帰途、寺の衰退を憂い、塔の復興を命じたという。建築様式から、室町時代に建立されたものと推定され、「和様」の外観は堂々と落ち着いた雰囲気呈している。 第一層の大日如来が安置されている仏壇の鏡天井を囲む「如意頭文」は「禅宗様」の建物で用いられるもので、一層の内部は赤や緑の顔料で、鮮やかに塗られていた。 別所温泉の安楽寺八角三重塔とともに大日如来が安置されたふたつの塔は、レイラインの発着点を示す象徴とされたのかもしれない。	
26	しなのこくぶんじせきぞう 信濃国分寺石造	市指定	高さ152cmと常楽寺のものに比べるとやや小振りであるが、各部の様式・手法などから鎌倉期の多宝塔とされる。常楽寺のものがレイラインの終着点に置かれた塔だとすると、こちらは起点とされた塔なのかもしれない。 屋根や塔身にある窪みは堅い石で叩いて粉にして飲むと病気が治るとか、お守りにすると良いという信仰の痕跡とみられる。	
27	こずてんのうさいもん 牛頭天王祭文	市指定	信濃国分寺八日堂縁日（毎年1月8日）で頒布される「蘇民将来符」のいわれが記されている。この「祭文」の写しは全国で4通確認されているが、文明12（1480）年に書写された国分寺のものが最古と判明した。 牛頭天王は薬師如来が姿を現したものとされ、厄病除けの神として信仰され、やがて息災延命、七難即滅などの諸々の御利益が付け加わりながら信仰されてきた。	

28	うえだしやうかどう 上田市八日堂の そみんしょうらいふはんぶしゅうぞく 蘇民将来符頒布習俗	国選択無形 民俗文化財	「蘇民将来符」は厄除けのお守りで、家の戸口に掛けたり、神棚に供えられる。泥柳（ドロヤナギ）の木を手彫りした六角錐形の護符だ。 室町時代から制作されてきたといわれ、門前に家を構える人たちで作る「蘇民講」が重要な役割を果たしている。まず、師走の朔日に寺に集まり、木材から護符を「蘇民包丁」で切り出す「蘇民切り」を行う。 寺で頒ける護符には、住職が大福・長者・蘇民・将来・子孫・人也の文字と魔除けの紋様を、墨と朱で六面に交互に描く。また、蘇民講の面々は、文字とともに、家それぞれにオリジナルの七福神の絵姿を描いた護符を作って頒布する。 蘇民将来信仰は全国に見られるが、木製の護符を分けるところは少なく、蘇民講と寺の制作・頒布過程が他に見られない行事である。	
29	ようかどうえんにちず 八日堂縁日図	市指定	描かれている信濃国分寺本堂の形状等から、江戸時代中期前半に描かれたものと推定され、写実的であり、当時の参詣風景等が分かる風俗史料として貴重である。 この図からは「蘇民将来符」が頒ける姿や、農業に必要な種子や農具、生活必需品、浮世絵等の嗜好品が商われている様子がうかがえ、当時の人々の暮らしと祈りの一端が垣間見える。	
30	どろみや 泥宮	未指定 (建造物)	泥宮は字の如く「大地（泥）」を御神体とし、生島足島神社が創建された時に、遺霊をここに残したという。「泥宮」という呼称は寛政2（1790）年以降とされ、それまでは「諏訪大明神」であった。 かつては生島足島神社の西鳥居とまっすぐな道で繋がっていたといい、御神体を同じくするこのふたつの神社は、深い関係があることを示す。 神社はレイラインを構成する、聖地のひとつとして親しまれている。	

31	いくしまたるしまじんじゃほんでん 生島足島神社本殿内殿	県宝建造物	平安初期にまとめられた「延喜式」に載る古社で、生島大神と足島大神を祭神とする。御神体は「大地」であり、日本列島の真ん中に鎮座する神だ。 寛政11（1799）年に生島足島神社と社名を改めており、中世以降には「下之郷大明神」「諏訪法性大明神」などと呼ばれ、武田信玄や真田氏、歴代上田藩主の手厚い加護を受けた。 生島大神と足島大神を祀る神社は全国的にも珍しく、近畿地方を中心に数社しかなく、東日本では皇居内宮中三殿とこのみである。 太陽が夏至には東の鳥居の真ん中から上がり、冬至には西の鳥居の真ん中に沈むよう、鳥居が太陽の至点と一致するように配置されており、まさに「太陽」と「大地」を結ぶ神社だ。 境内には夫婦櫓と呼ばれる樹齢800年を超えると推定される大木があり、良縁子宝等が祈願される。	
32	いくしまたるしまじんじゃ 生島足島神社 せっしゃすわしやほんでん 撰社諏訪社本殿	市指定	棟札から、慶長15（1610）年に藩主・真田信之が建てたことが判明している。諏訪神を祭神とし、雨神や農耕神ともされ、神格が龍や蛇、神使は蛇とされる。ここでは蛙が禁忌の動物であり、本殿との間にある神池では毎年正月の1月15日に蛙狩神事が行われる。境内には大蛇が住んでいて、神池には蛙はいないとされる。なお、神池は日によって色が違って見えるという。	
33	いくしまたるしまじんじゃもんじょ 生島足島神社文書	国重文	武田信玄武将の起請文（83通）ほか信玄願文、真田信幸寄進状など11通、合計94通からなる古文書群。 信玄が配下の武将に、謀叛しないことを誓わせた起請文や、越後の上杉謙信との戦いにあたって勝利を祈願した願文からは、信濃攻略を果たした信玄が、上杉との本格決戦に向けて神の加護を得ようとした心中を察することができる史料だ。	

34	ちょうふくじどうぞう ぼ さつりゅうぞう 長福寺銅造菩薩立像	国重文	長福寺「信州夢殿」の本尊として安置されている。アルカイックスマイルを特徴とする、像高 36.7cm の小金銅仏で、7 世紀後半の白鳳時代の作品と考えられる。 もとは上高井郡小布施町の旧家に伝わるものだったが、昭和 13 (1938) 年に長福寺に移された。	
35	べっしょせん てつどう し せつ 別所線の鉄道施設	未指定 (建造物)	蚕都上田を支えた鉄道網のうち、唯一現役なのが別所線。上田から別所温泉に至るこの路線は大正 10 年 (1921) に開通した。 電車が上田駅を発つと間もなく真っ赤な鉄橋を渡って千曲川を渡る。この千曲川橋梁は、大正 13 年 (1924) の建設で、橋長は 224 m。橋桁はプラットトラス 5 連からなり、一番端の斜材 (コリションストラット) を持っているのが特徴である。また、中塩田駅や別所温泉駅など、駅舎に近代の趣きを残す建物が多いことも特徴である。 別所線の上田駅から別所温泉駅まで 11.6km の軌道は、下之郷駅から大きく西に曲がり、終点の別所温泉駅までの軌道は、まるでレイラインに沿って夫神岳に向かっているように見える。	

構成文化財の写真一覧

1 安楽寺八角三重塔



(塔内 大日如来坐像)



2 木造惟仙和尚坐像・木造恵仁和尚坐像



3 常楽寺本堂



4 常楽寺石造多宝塔



5 北向観音堂



7 愛染カツラ



6 善光寺地震絵馬



8 舞田の石造五輪塔



9 前山寺三重塔



11 西光寺阿弥陀堂



10 ちがい石とその産地



12 中禅寺薬師堂



13 中禅寺木造薬師如来坐像



14 中禅寺木造金剛力士像

15 前山塩野神社本殿及び拝殿



16 法住寺虚空蔵堂 附 厨子



17 別所温泉の岳の幟行事



18 別所神社本殿



本殿の背後に鎮座する「本朝縁結大神」祠



19 鞍が淵と蛇骨石



鞍が淵



蛇骨石

20 千駄焚き・百八手



21 奈良尾石造大婆坐像



22 保野の祇園祭



23 信濃国分寺跡



26 信濃国分寺石造多宝塔



24 信濃国分寺本堂



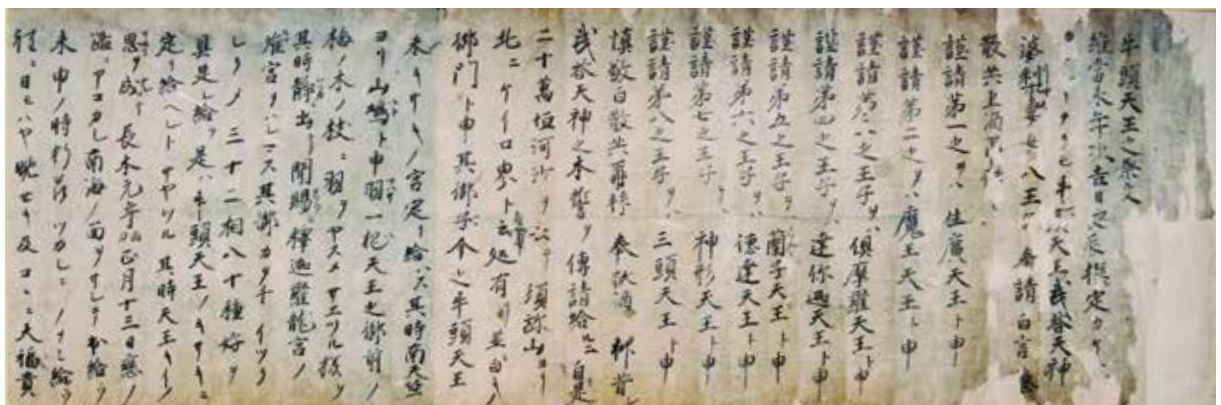
25 信濃国分寺三重塔



(塔内 大日如来坐像)



27 牛頭天王祭文 (冒頭部分)



28 上田市八日堂の蘇民将来符頒布習俗



29 八日堂縁日図



本堂前で 蘇民将来符を頒布する光景

30 泥宮



生島足島神社



31 生島足島神社本殿内殿



32 生島足島神社摂社諏訪社



33 生島足島神社文書



34 長福寺銅造菩薩立像



35 別所線の鉄道施設

